



Title	『塵荊抄』の研究
Author(s)	松原, 一義
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42206
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	まつ ばら かず よし 松 原 一 義
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 15907 号
学 位 授 与 年 月 日	平成13年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学 位 論 文 名	『塵荊抄』の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 伊井 春樹 (副査) 教 授 後藤 昭雄 助教授 荒木 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、師僧と児二人による物語の体裁をとりながら、仏教、神事、歴代天皇、源平両氏の列伝や文学、遊芸、その他さまざまな知識を披瀝した中世の説話的な雑纂書の『塵荊抄』についての、成立基盤や他の作品との関連を多方面から論究した内容である。全体は四章と資料翻刻の付章からなり、それぞれに節を設けて構成し、400字詰原稿用紙に換算しておよそ1600枚ばかりになる。なお、『塵荊抄』は現在のところ国立国会図書館蔵写本11巻11冊の存在が知られているにすぎなく、部分的な研究はなされているものの、全体像の体系的な考察には及んでいない。

第一章『『塵荊抄』の成立と構成』の第一節「木戸孝範と『塵荊抄』の成立」では、『塵荊抄』が文明14年のころに執筆され、延徳3年に書き継がれたとの論拠を手がかりに、著者の可能性として木戸孝範を提唱する。それと関連して、宗祇が源氏物語の青表紙本を相伝したとされる謎の人物「志多良」について、新しい視点から孝範を指すとの提案もする。第二節『『塵荊抄』の対話戯曲構成』では、老僧と玉若・花若の二人の童子による対話は、戯曲的な構成であるとし、作品の効果的な表現の背景をさぐる。第二章『『塵荊抄』の位相』では、第一節「『長能私記』の逸文攷」、第二節「『伊勢物語秘注事』とその周辺」、第三節「『人丸と赤人』攷」とし、『塵荊抄』の記述と各種の資料との関連性を考察し、それぞれの意義と位置づけをしていく。第三章『『塵荊抄』と神仙譚』では、第一節「竹取翁譚攷」、第二節「浦島子譚攷」において、神仙譚としての昔話の成立と背景、説話の伝播の相を論じ、第四章『『塵荊抄』と仏法』では、第一節「『隠れ蓑』物語の系譜」、第二節「藤氏の栄華とその周辺の文学」、第三節「『伏見の翁』とその周辺」を取り上げ、『塵荊抄』所収の説話の背景として、仏典と深い関連のもとに成立していることを明らかにする。なお、付章「資料翻刻」では、本論と関係の深い桃園文庫蔵『伊勢物語秘柱』と、伊達文庫蔵『松が浦島』とを全文翻刻する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

『塵荊抄』は中世特有の仏教、神道の諸説を始め、歴史、文学等さまざまな学問分野の考証、遊芸、説話などを含む膨大な内容を持つ雑纂的な内容だけに、作品全体を対象とし、それぞれの位置づけをするのは容易なことではない。論者はそれに果敢に取り組み、可能な限りの各種の資料を駆使し、作品の意義を解明し、文学史的な関連性を求めて

いこうとする。それによって得られた成果も大きいが、また考察の対象から漏れた分野も多く、今後は学際的な研究方法も考慮される必要があろう。本論の新見の一つに、『塵荊抄』の作者を木戸孝範とする考証があり、その確認のもとに作品を読み解いていこうとしており、その研究姿勢は至当であるにしても、前提はかなり不確実な要素も多い。『雲玉和歌抄』著者の馴窓は孝範と親密な関係にあったことは知られてはいるが、そこから知られる孝範伝や『孝範集』等の資料によって『塵荊抄』と結びつけるまでに、現状ではまだかなりの径庭があるように思う。

数多くの資料を博搜して『塵荊抄』と共通する文学史的、歴史的な基盤を明らかにし、諸説と密接な関連のもとに伝来している資料の発掘は貴重な発見であり、従来とかく模糊としていた作品の位置づけがかなりの程度明らかになったといえよう。散逸する『長能私記』の収集とその注釈書としての性格、人丸・赤人を一躰とする『塵荊抄』説にいたる背景、神仙譚としての竹取翁や浦島子物語の伝来と広がり、隠れ蓑物語と仏典の『法苑珠林』、その伝来に関与した西円と冷泉家の問題、藤原氏の栄華と興福寺及び縁起とのかかわりなど、興味ある問題を多方面から剔抉し、真摯に追究していく態度は大いに評価できるであろう。作品の性格上避けられないとはいえ、やや類推に傾き、強引に解釈するきらいもあり、論理の構築よりも繁雑なまでの資料の引用によって説を展開しようとする記述は、難点といえ難点といえる。ただ、複雑で特異な『塵荊抄』という作品を、広い視野のもとに分析していった点は、今後の国文学界に裨益するところ大なるものがある。このような次第で、委員会は本論文を博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。